特別寄稿

サーツ誌創刊５０号に寄せて　―創刊号に学ぶ―

太田統士

早いものでこの号でもって 50 回記念誌になるという。これを記念して「サーツ誌 50 号の軌跡」という題を頂戴したが、軌跡を語るには数誌が足りないようでなので、創刊号の内容を顧みてあらためてサーツの在り方を考えてみたい。

創刊はまだ NPO の認可が下りる 5 ヶ月まえの 1999 年 6 月発行で、和田代表が巻頭文は、

「人に認められる新しい技術と云うモノは”**筋の良い技術**”であることが絶対条件であり。これと同じように新しいアイデアのもとに作られる組織にも”**筋の良さ**”が必要である。この回の設立趣意文を読めば、これほど筋のよい協会は他には考えられない。本質的にこの協会は大きく育つことが保証されているようなもの」

また創刊特集の第 1 番に松村代表は、サーツの社会的意義と役割と題して、

「自分たちの築いてきた建築技術の意味と可能性を人々に理解してもらわなければならない。そうすることで技術者としての”**新しい使命感**”を形作っていかなければならない。サーツが目指すのは、”**そうした市民社会に根ざした新しい建築技術者のあり方**”である」

寄稿して頂いた二本ＮＰＯセンター常務理事の山岡義典氏は、

「自分の利益には直接つながらない活動に参加するには、何がしかの動機が要る」とし「それを促す要因は、それぞれの文化的伝統や時代状況によって特徴がある。そのような要因に縁・恩・信・義・愛も考えられる。”**さて、サーツは何が強くて何が弱いのか”何を支えに発展するのか**”その問いかけからスタートして見てはいかがだろう」

と、サーツ発足に際して励ましや催促をされている。これらの言葉は 12 年経った今も新鮮な言葉として、我々の胸に響きはしないだろうか。50 号記念を迎え、また中期計画策定を考えなければならない今、自ら顧みて創刊号の内容を噛み締めたい。